



日本経済史研究者にとって最高の環境

関西学院大学経済学部 寺本益英

筆者は1998年以降6年にわたり、農林水産政策研究所において、依頼研究員として研究の機会を与えられている。以下では、筆者の中心的研究課題である戦前の茶業史にふれながら、本図書館の特長を紹介してみたい。

依頼研究員の初年、筆者は最初の著書『戦前期日本茶業史研究』（有斐閣、1999年）を執筆中であった。日本茶は幕末開港によって花形輸出商品として脚光を浴び、第一次世界大戦前まで外貨獲得に大きく貢献してきた。最大の市場はアメリカであり、静岡茶を中心に国内生産の60～80%が輸出された。しかし戦間期に至ると、工業化の進展とアメリカ市場へのインド・セイロン紅茶の進出により、輸出の勢いは急速に衰えていった。

「輸出商品としての日本茶」に関しては比較的文献が多く、研究はスムーズに進んだが、筆者の目標は、戦間期における国内流通の実態、さらに宮崎・鹿児島といった新興産地の台頭、1920年代末から本格化した、ソビエト、アフガニスタン、北アフリカ諸国など未踏のマーケットへの進出も盛り込んだ戦前期80年間の一貫した茶業史を描くことであった。そうした折、本図書館で茶業組合中央会議所発行の『茶業彙報』、『茶業組合中央会議所統計年報』を発見したのである。これらは、茶業界の年次報告書兼データ集の性格を持つが、これまでに訪れた茶業関係機関では断片的にしか残っておらず、まとまった情報にはならなかった。そこで筆者は早速、府県間の移出入データ、鉄道の駅別発送・到着データの分析に着手し、先行研究で十分解明されなかった国内における茶の流通動向を明らかにすることができた。一方宮崎・鹿児島の両産地も、1930年代後半、福岡や大阪への移出を大きく伸ばしており、大消費地への進出が数量的に確認された。また、『新販路地に於ける茶業調査』（茶業彙報第22輯）、『北アフリカに於ける茶業調査』（同23輯）、『海外新販路茶市場調査諸報告』（同30輯）などは、アメリカに代わる新市場に関する詳細なレポートである。交通や通信技術が未発達時代に、これだけ綿密な市場調査を実行した茶業界の熱意と情報収集力の高さに驚嘆しつつ、一気に読み進めたのを覚えている。

統計資料の充実も特筆に値する。茶業が戦前期日本の経済発展に果たした役割は、農業全体の中での位置づけ、あるいは地域産業に占める地位の変遷を示してはじめて説得力が出る。このテーマに対しては、明治初期の『府県物産表』、『全国農産表』、それに続く『農商務統計表』、明治中期以降の『府県統計書』、『日本帝国統計年鑑』など、一般図書館では散逸が甚だしい資料を系統的に活用し、納得のゆく結論を得ることができた。

歴史研究の基本は史料の発掘である。今思い返せば、著書執筆の最終段階で本図書館を利用できたのは実に幸運であった。さがし求めていた史料に出会い、丹念に事実を拾い上げ、編集

する作業を繰り返すうちに、これまでぼんやりしていた日本茶業史の像が、いつの間にかはっきりした形に変わっていったのである。

その体験が原動力になって、現在筆者は在来産業の研究に取り組んでいる。簡素な技術を基盤とし、家族経営によって成立していた無数の小型産業（農家の副業）は、生産額の低さからこれまで研究対象にされなかった。しかし実際は、農閑期における労働力の有効活用や、景気変動のクッション、さらには農村不況の打開に役立ち、近代産業と相互補完的に発展してきたのである。本図書館が所蔵する約 150 冊の農家副業関係文献の整理が楽しみである。

利用案内（開館時間）	午前 10 時～午後 4 時 30 分
（休館日）	土曜日，日曜日，祝日および年末年始
（利用に際して）	受付で入館手続きをおとり下さい。
（図書館の URL）	http://www.primaff.affrc.go.jp/library/index.htm